

学会ニュース

..... ・ 第46号 2004年10月

目次

・ 第26回大会および第27回大会について 1
・ 「博物学の世紀」の復興へ——21世紀の科学は18世紀に回帰する!? 筑波 常治	... 1
・ なぜ18世紀なのか	野口 榮子 ... 5
・ 第12回日韓美学研究会報告	高橋 博巳 ... 9
・ 事務局より 10

第26回大会および第27回大会について

今年度の第26回大会が6月12日（土）、13日（日）に、南山大学（名古屋）で開かれました。開催校責任者は、中矢俊博会員でした。105名の参加者を得て、盛会の内に終わりました。今回は7名の会員が自由論題で発表され、また共通論題「奢侈論」（コーディネーター：森村敏己会員）は4名の会員がご報告くださり、例年以上の多彩な顔ぶれとなりました。

また、来年度の第27回大会は、2005年6月中旬に日本大学文理学部で開かれる予定です。詳細は、次号の学会ニュースにおいてお伝えいたします。

「博物誌の世紀」の復興へ

21世紀の科学は18世紀に回帰する! ?

筑波 常治

18世紀は科学史上「博物誌の世紀」と呼ばれることがあるが、二とおりの意味で正当な呼び方といえよう。

まず狭義の史実として博物誌および関連領域で多くのすぐれた古典的業績が生まれた。リンネ（1707-1778）による生物分類学の体系化、ビュフォン（1707-1788）の大著『博物誌』、ギルバート・ホワイト（1720-1793）の書簡集『セルボーンの博物誌』などである。ただし細かくみると分類学と博物誌はかならずしも一体ではなく、基本的発想で対立しあう側面もあるのだが、ここではあえて深入りしないことにする。

さらに象徴的な意味あいでも、18世紀はそう呼ばれるのにふさわしい。博物誌の根底をなすのは多様性への興味である。自然界をふくめてこの世界がいかに変化に富み、多種多様の存在に満ちみちているか、それにおどろきと関心をむけ、その具体的な内容をあきらかにしよ

うとした努力が、結果的に前述した業績の誕生へとつながったのだった。そして18世紀の自然研究のあり方をみると、どの分野もが多彩であり、さまざまな方向へと発展しうる可能性を秘めていたことがわかる。いまふりかえてみて混沌たる多様性こそが18世紀の学問の特色で、それじたい文字どおり博物誌的な状況といえるのではないか。

ところがその後、この混沌とした多様性のなかから、きわめて限られた一方向への進路だけが選ばとられ、その道を進むことだけが正しい進歩発達という価値観が確立された。この価値観の線上に19世紀から20世紀後半にかけての「現代科学」が成立してゆく。これは一面まぎれもなく18世紀的状况からの進歩発達にちがいがなかったが、反面で18世紀が内包していた豊かな可能性の多くを「非科学的」という名のもとに捨て去ってしまったことを意味しよう。

19世紀の少なくとも自然研究の分野では、〇〇学と呼ばれる部門別科学が成立した。と同時に個別部門それぞれの間には、いわばナワ張りをわける垣根が設けられた。そしてナワ張りごとに「専門家」が出現し、専門家の研究のみが高い価値と信用を得るというしきたりが生じた。一方、垣根をこえての他部門への介入は原則として禁忌（タブー）となった。

例えば「生物学」（Biologie）である。その源流のひとつは博物誌だった。博物誌は前述のように世界の多様性に関心をむけ、多様な内容をつくっている存在のひとつとして、生物のさまざまな種類にも注目した。しかしそれはあくまでも多様性のなかのひとつであり、同等の価値ある興味の対象として、地質・岩石や気象や天体などにも注目し、とくに同じ地球上の存在として生物および地質・岩石はしばしば同一人物によって並列的に研究されていた。それが19世紀初頭に生物だけが他から切りはなされて「生物学」の名称のもとにひとつにまとめられた。生物以外の存在もそれぞれの特性におうじて「地学」「気象学」「天文学」……などにわけられ、個別部門としてのナワ張りをかためることになった。

そのように細分化されながら、同時にそのすべてをつらぬく普遍的な統一法則が認知されるようになったことも、現代科学の大きな特色だった。すなわち生物も無生物もともに物理法則によって処理でき、また処理されなければならないとするいわゆる「物理学帝国主義」が樹立される。研究手段として「実験」が最重視され、それで得られた結果を数字と数式をもちいて解析する「定量的方法」が不可欠となった。かつての博物誌の研究方法の中心は「観察」であったが、それは実験の一部に組みこまれてしまい、観察だけにたよるやり方はしよせん素人（アマチュア）の道楽にすぎないとして、科学の名のもとに蔑視される事態となった。

しかし人間という人間のすべてが歩調をそろえていっせいに進むわけではない。19世紀のただなかに生まれあわせながら、18世紀的な感覚をそのまま引きづって自然研究に従事した「時代遅れの」人物もいた。その代表が——誤解をおそれずいえば——チャールズ・ダーウィン（1809-1882）だったといえよう。ふつう生物学史上の最大の偉人のひとりとされているダーウィンだが、その研究の対象は博物誌の伝統そのままに生物と地質・岩石とが同等にあつかわれ、ともに進化論を集大成する重要な素材になっている。『地質学原理』の著者であるチャールズ・ライエル（1797-1875）は現在でこそ地学史上の人物として生物学史から区別されるが、当時にとってはダーウィンと最も親交のあった同学の士にはほかならなかった。そしてダーウィンがもちいた研究手段はもっぱら観察であって狭義の実験ではなかった。

そういうダーウィンによってまとめあげられたものが進化論である。それは精密な実験の結果を数学的に解析して得られた学説ではなく、多様混沌たる大自然を総合的にながめての考察からわりだされたもので、細分化された専門性を重視する現代科学とはなじめない宿命をおっていた。19世紀後半から20世紀をとおして、生物学者のほとんどは進化論を支持した。支持はしたものの彼らの日常の研究内容とはつねに遊離していた。いわば神棚に祭りあげら

れたような状態で浮いていたのである。したがってそれはつねに進化「論」であり、進化「学」にはならなかった。もちろん生物学者のなかには、実験的研究と進化論を結合させて「進化学」をうちたてようと試みた人もいた。しかし結局その目的は果せず、未完のままにとどまらざるを得なかった。

ひとくちに進化論と称しても、いくつかの異なる主張があり、対立しあう部分も少なからずあった。最も多くの支持者を得たのはダーウィンの主張であったが、支持者によってその解釈の仕方はさまざまにわかれ、相互に異なる修正意見を派生させた。ということはダーウィンの主張そのものが相当に混沌とした内容であったことを示している。

ダーウィンにくらべて、パストゥール（1822-1895）ははるかに現代的な科学者であった。細やかな実験をくりかえしおこない、その成果を綿密に分析して解答すなわち学説を引きだしている。しかし全体としてその研究領域は、化学、生物学、医学、と多岐にわたり、どの分野でも特筆される業績を生んでいる。といってけっしてディレクタントではなかった。最初は化学者として出発し、腐敗変質と呼ばれる物質の化学的変化の過程を追究した。ところがその変化が微生物によって引き起されるとわかり、微生物の研究に進まざるを得なくなった。そしてこの分野で多年にわたって論争のまよになっていた「自然発生説」の当否に挑戦し、ついにこれを否定して、微生物学者としての押しも押されぬ地位を確立した。するとこんどは、人類の歴史とともに人間を苦しめつづけてきた感染症（いわゆる伝染病）の原因が、それぞれ特定の微生物であることが判明し、その防除の研究をふくめて医学の分野に進出せざるを得なくなった。つまりこの当時、〇〇学のナワ張りのまだあいまいな領域も残っていて、パストゥールはそういう領域にふみこんだのだとみなせよう。その意味でパストゥールには18世紀的な名残りも感じとれよう。

メンデル（1822-1884）の場合は、完全な現代科学者と呼ぶに値しよう。エンドウマメというひとつの素材を厳選し、生物であるそれを物理学者の感覚であつかい、細かいメシベとオシベの交雑の実験をたんねんにくりかえして、その結果を数学的に処理し、いわゆる「遺伝の法則」をみちびきだした。博物誌とは対照的な研究のやり方である。だが生物学界に18世紀的な名残りがかなりあった19世紀にその価値は認知されず、現代科学の特性が鮮明化した20世紀になって、にわかに脚光をあびた。そして20世紀が——少なくとも生物学者の間で——「メンデルの世紀」と呼ばれたのも、けだし妥当だったにちがいない。

もっともメンデルが19世紀当時に受け入れられなかった理由は、ほかにもあった。それは「職業」であり、むしろこのほうが大きかったかもしれない。しかもこれは現在までつづく問題でもある。19世紀には個別部門ごとに専門家が出現したと前述したが、では専門家である資格は何によって証明されたか？ 研究業績はもとよりいうまでもないが、それと同時に、むしろそれ以上に（？）、本人の職業がその証しとなった。具体的にいえば、大学教師、研究所員、博物館員、動植物園の勤務者……などなどで、それらの肩書きが専門家であることを認知させた。メンデルはこれから外れていた。彼は地方都市の修道院の神父であり、職業的資格からいえばアマチュアにすぎなかった。そういうアマチュアが、専門家と呼ばれた人びと以上に、専門家にふさわしい研究をやりとげていた。まさに歴史の面白さであり皮肉であったといわねばなるまい。

しかし——

20世紀も後半になってから、そういう学問のあり方に変化のきざしが生じる。いったん出来あがった〇〇学のどれもが、一方でいっそういちじるしく細分化され、新しいいくつかの新分野にわかれていった。〇〇学が△△〇〇学になり、さらに□□△△〇〇学になるといったふうに。それぞれごとに新規に学会が作られるため、学会の数はいまや国際的にも国内的にもおびただしい数にのぼっている。

一方、それらの学会につどう顔ぶれをみると、既存の〇〇学の枠ぐみにとらわれず、多種多様な分野の人びとが集まりだしている。専門別の垣根がくずれはじめ、ナワ張りの境界があいまいになりつつある。この研究状況をさして「学際」という言葉が流行しだし、「境界領域」と呼ばれる課題がしだいに重みを増してきている。いわば学問の世界に混沌たる多様性がよみがえりはじめた。

この傾向の最先端をきったひとつが、化学と生物学の結合であろう。生命現象を化学的見地で解きあかそうとする「生化学」が、いまや最重要分野として完全に地歩をかためた。メンデルがつきとめた遺伝の仕くみは、DNA（デオキシリボ核酸）という化学物質に依拠することがあきらかになった。そして進化の機構もまたDNAのはたらきと関連づけて解明されはじめた。進化研究がようやく実験科学の方式をとり、実験による証明の段階へと進みだしたわけだ。

これは換言すると、19世紀から20世紀にかけての現代科学が排除してきた18世紀の博物誌的状況が、ふたたび見なおされていることを意味するのではないか。かつての〇〇学から置き忘れられた18世紀の遺産が、〇〇の方法と結びつくことで新しく脚光をあびる。その感性を感じさせるのが、20世紀の末から21世紀にかけての学問状況といえるように思う。

もとより混沌多彩な遺産のうちで、見なおされはじめたものは一部にすぎない。そして見なおすに値しない部分、忘却されて当然の部分もまた少なからずあるだろう。再評価・再発見の価値ある部分とそうでない部分とを見わける前提としても、18世紀全般への関心を高めることがいまこそ必要と考えられる。

なぜ18世紀なのか

野 口 榮 子

日本18世紀学会は、国際的な18世紀学会の日本のブランチとして、1979年に成立した。その翌年くらいに入会させていただき、そのころ東京や名古屋で活躍しておられた小林善彦、浜林正夫、海老沢敏、遅塚忠躬、海保眞夫、水田洋・珠枝夫妻、白井厚・堯子夫妻、筑波常治、鷺見洋一、原好男、市川慎一、森洋子、戸部松実、榎沢雅子（敬称略、書ききれなかった方々はお許してください）等の先生方とお会いできたのは幸であった。

関西に事務局がまわって来た当時、京都大学文学部のフランス文学の中川久定教授が代表幹事で、京都大学経済学部の木崎喜代治教授、大阪市立大学のドイツ文学の南大路振一教授、立命館大学のフランス文学の佐々木康之教授、京都産業大学のフランス文学の鈴木峯子助教授などとともに、その時は帝塚山大学に勤務していた私も、常任幹事のひとりとして会計などを担当させていただいた。私はそれ以前から美学会の会計監査をしていたが、実際に学会の会計幹事となって、いろいろな問題を体験した。国際18世紀学会の年会費の振込みの仕事などは、たいへん勉強になった。そのたまものでその後に、他の学会の会計報告書をみる機会があると、直ちに理解して問題点を指摘できるようになっていたのは、余得と思っている。仕事の中で木崎氏が、殺風景な学会の事務では茶色の封筒を発送するとき、記念切手を使うのがよい、さらに切手を用いた発送先を平常の事務の場合も記録しておくのがよいなどを教えてくださり、郵便物に記念切手を用いることは私の中で今でも習慣となっている。

常任幹事会や打合わせ会を開催するために、京都大学の楽友会館（現在はすぐ近くに移り、京大会館という名称）に会場を申込みと、顔なじみになった受付氏が、「あまた18世紀学

会ですね。17世紀とつく研究会もあるからまちがえないようにしないと・・・」と言う。「そのほかにも世紀のつく会がありますか」ときくと、「19世紀も20世紀もありますよ。そうそう21世紀という申込みもあります」と言っていた。まだ20世紀がだいぶのこっている頃である。

中川代表幹事の時代には、京都大学と京都女子大学で日本18世紀学会の大会があり、ディドロ（1713～84）の没後200年（1984年）の国際シンポジウムが京都大学の主催で開かれた時もふくめて、お手伝いをした。国際学会の成果は、中川久定氏編の「ディドロ、18世紀のヨーロッパと日本、岩波書店、1991」、フランス語版では「Actes recueillis par Hisayasu NAKAGAWA, Diderot – Le dix-huitième siècle en Europe et au Japon, 1988, Centre KAWAI : pour la Culture et la Pédagogue, Nagoya」となった。そのころ中川氏が新聞各紙に、日本18世紀学会について「世界全体の18世紀学会の中の日本の18世紀学会で、研究対象は世界および日本の18世紀である」という趣旨の紹介文を書いておられた。

学会や研究会で、研究対象の世紀を明確にすることはそれほど不思議ではない。それぞれの世紀には、研究対象や分野による問題の必然性があり、とくに近世になってからは、100年毎に区切って世界中の問題を取扱うことが好都合な面が多い。それはたんなる物理的な時間を超えた意味のある時間と考えられるのである。とにかく100年毎に分けたほうが便利だから、まず区分してそこに各自の研究テーマを帰属させるというのではない。世紀はたんなる研究テーマの居住地の番号ではないのである。

私自身が18世紀という時代に出会ったのは、京都大学の文学部で美学美術史学を専攻し、美学という分野の出発点が18世紀のドイツのバウムガルテン（1714～62）やカント（1724～1804）によるということを知ってからである。美や芸術を創り出し理解する主体としての人間が、さまざまな素材（石や木やカンバスや絵の具、自然や言語もふくめて）を通して対象と関りあうその理論的な構造が18世紀に明確な姿をとり、カントの判断力批判に代表されるのである。カントの言う「崇高」は17世紀のバロック美術に、「美」は18世紀のロココ美術に関連すると言われていることも知った。カントの見た美術を知りたいと思った。とくにロココとよばれる美術は、どのようなものなのかについて興味があった。カントの美学は、美学の基本として現代までつづく問題を提供している。そして18世紀のロココ美術もまた19世紀を経て現代まで連続する美術の基本的な相貌を示している。17世紀までとは異った市民的な面をもっているのである。20世紀になって興った現代芸術という奇妙な現象も、18世紀以来の系譜を下敷として展開したものであり、現在のところそれを取扱う美学も美術史学も、その枠を完全には越えていないというようなことに気づいたのである。

18世紀のヨーロッパの美術は、フランスを中心に展開するが、王立絵画彫刻アカデミーによる隔年の展覧会「サロン展」がルーヴル宮殿で開催され、それに伴って啓蒙哲学者のディドロが、その批評つまり「サロン批評」を書いていることを中川氏が教えて下さった。京都大学の図書館にあるアセザ・トゥールヌ版のディドロ全集から「サロン（Les Salons）」や美術にかんする部分をコピーして熱心に読んだ。当時の美術の歴史の研究も同時に進行させて、私にとってこの上ない楽しい時間となった。

美術とは主として建築・彫刻・絵画・工芸を意味する。それらはヨーロッパではどの時代も相互に関連しながら展開してきた。建築の石造りの外観や内装もまた美術と考えてよい。彫刻や絵画や工芸がその中に位置を与えられるのである。18世紀の美術は、それまでヨーロッパの中心であった神殿や教会や宮殿から個人の邸宅を飾る方向に進んだので、相互関連がより緊密になった。教会の内外に設置された美術は、キリスト教という主題を離れることなく、とくに17世紀のバロック美術には宗教改革にたいする反宗教改革の面がつよかったので、「崇高」と言えるような独特の傾向があった。それは18世紀と比較すると、個人的市民的邸宅の性格がすくないのである。フランスの17世紀は、古典主義的バロックといわれるので、

反宗教改革的傾向はそれほど中心ではない。ルイ14世（1638～1715）のヴェルサイユ宮殿にみられるような落ついた荘重なムードがフランスの17世紀である。そこには中世以来イタリアのルネサンスを経て到達した「宮殿」の美術が集大成されている。貴族や高官にとっては、それは王の美術であり、真似てはいけないものでさえあった。しかし18世紀になるとヴェルサイユ宮殿の中に大きな変化があらわれた。1701年に改装された「楕円形の窓」のある部屋は、白と金を配した壁面パネルや金地に童児が遊ぶ壁面上部の軽快で華やかな装飾など、目をみはるものが登場する。ルイ14世はまだ63才で、没するまであと14年も在位するのに、改装に当って18世紀のロココと称される傾向が出現したのである。もちろんヴェルサイユ宮殿内の変更は、ルイ14世の許可のもとにおこなわれたというが、パリの中でも同様の傾向があらわれている。そしてヴェルサイユ宮殿もふくめてルイ15世（1710～75）、ルイ16世（1754～93）の時代を通してフランス革命に向って、新しいロココ美術が成立するのである。やはり18世紀は、美学美術史学においてひとつのまとまった相貌を呈している。そしてそれはすでに述べたように市民的な個人的な生活の中で求められた美や芸術なのである。ルイ14世という絶対王制の代表者にたいして、遠慮がちに制作されていた王以外の肖像画は、おびただしい数に上り、各貴族や市民の邸宅内の必需品となる。室内の壁面パネル、家具、工芸品にも個人の邸宅用の香りがつよくなる。固有名詞を必要としない人々の日常生活を表す風俗画など、その方向は20世紀から21世紀のわれわれの方へ向く。17世紀のバロックとは異なる現実が、いつのまにか生れていたのである。1738年にはヘルクラネウム、同じく48年にはポンペイの発掘がおこなわれ、イタリア旅行や古代ローマへの関心が増大し、新古典主義が生れたのも18世紀である。ロココは装飾的で軽快な様式で、新古典主義とは矛盾するという意見もあるが、バロックから変化した新しいロココの性格の中には、ギリシア・ローマ的なものを求める側面がかなりつよく存在するといえる。

ヨーロッパの美術史を繰り返し教室で語り、研究書を読み学会に出席し、現地へ行きなどして、いろいろなことを考えて過してきて、最近とくに気づいたことがある。それは簡単に言えば、18世紀の中にヨーロッパの美術の歴史の縮図があるということである。美術は物質素材による作品の製作によって伝えられるから、どの時代をとっても前の時代の遺品が積み重なって影響を与えている。しかし18世紀のとくにフランスでは、ギリシア・ローマ的な傾向や、中世キリスト教のもっているもの、ルネサンスの新風、イタリアで興ったマニエリスムという技巧的な方向、バロックの諸側面など美術史のほとんどすべての時代が、生きた姿で多くの場所にちりばめられている。絵画では、次の19世紀の印象派を予測する面もみられる。それらは過去をたっぷりと受けとめながら、次の時代へのメッセージを送っているようである。阪大定年退官後の現在は、立命館大学の神林恒道教授（主として18世紀のドイツ美学専攻）が、著作や美学会やシンポジウム等で、現代にたいする「18世紀からの問い直し」ということを発言されるのも同様の趣旨なのである。

このような点は日本の18世紀についても言える。京都大学でのディドロの没後200年の国際シンポジウムのすこし前にそのことに気づいた。私の生家は祖母も母も表千家流の茶道を趣味としていたので、国際学会では中川先生の御発案により会場の傍に椅子席を設け、内外の参加者に薄茶を喫んでいただいた。実際は私の母とそのお弟子さん方に頼んだ。日本18世紀学会の京都の大会の時も、関西学院大学の茶道部の人たちによって、皆さんに薄茶のおもてなしをした。茶道は桃山時代の千利休（1522～91）の時代から現在のような形式をとったといわれるが、実は現在の形態は18世紀からなのである。利休の切腹後は、現在の京都市上京区寺内通小川に千家が再興されて、三代目の宗旦から表千家を中心に21世紀まで続いている。七代目の如心斎宗左（1706～51）の頃には茶道人口が増加し、現在のわれわれが用いている八畳（広間）やもてなしの形式、稽古の段階などが成立した。このことを「18世紀の茶道」

として国際シンポジウムで発表し、2冊の記念出版にも掲載していただいた。このことを日本文化の関係者に話すと、例えば「生花」の上でも同じような現象がみられるという。それは生花人口の増加と形式の変化となってあらわれて現在に繋がっているようである。「俳諧」についても同様のことが言えるらしい。私は日本の文化は、東海の孤島にありながらヨーロッパの文化の変化と対応して展開している面があり、興味ふかく思っている。それは韓国や中国などと関連のあった時代も鎖国してからも同様のよう思う。これからは日本の問題についても考えながら、ヨーロッパの18世紀の美学美術史学、批評などについて仕事をつづけて行きたい。日本18世紀学会の現在の代表幹事である佐々木健一教授の研究の姿勢や問題意識に示唆されることが多い。他の会員の方達や最近入会された方、分野の異なる方々もみな同志のような気がする。それはやはり18世紀という時代が、洋の東西を問わずひとつの転換と現代への連続性を保有しているからだと思う。もちろん皆自分自身の道を歩いているのだから、いちいちその共通性について断る必要はない。反対の意見もあるだろう。今回あらためて本学会の年報第15号（2000年7月）を読み返すと、各分野からの綿密な優れた研究や展望が掲載されている。この時の大会（第21回）の共通論題は「日本の18世紀研究—過去から未来へ」であった。この学会のサロンの雰囲気に触れた個所も散見する。私は倅せな気分につつまれるのである。

第12回日韓美学研究会報告

高橋博巳

8月6日から11日まで、広島大学を主幹校に第12回日韓美学研究会が開催された（広島比較美学研究会共催）。2年前、浜下昌宏先生のお誘いで参加した神戸女学院大学での研究会の楽しかったことが忘れられずに出かけた二度目の今回もまた、豊かに充実した研究会だった。5泊6日の長丁場で、さすがに最終日の「異文化交流時代の美学」シンポジウムの頃には、インスパイアリングな諸発表に触発されながらも、老生の私など意識も朦朧として頭の中は'混沌'だった。これは冒頭の発表で曾繁仁教授（山東大学）の道家思想の話を聴いたからというより、ひとえに今夏の酷暑のせいだったろう。以下、18世紀に関係する話題に絞って報告したい。

8月8日、エクスカージョンを兼ねて朝鮮通信使停泊地だった下蒲刈島で関連の見物を楽しんだあと、港の見える三之瀬集会所の窓を開け放って、「東アジアの異文化交流」シンポジウムが開かれた。司会・青木孝夫(広島大学、以下敬称略)で、発表者と題目は以下の通り。

兪俊英（梨花女子大学）"Landscape painter Chong Son (1676-1759) and Korean Scholar-envoys to Japan in the Genroku Era — with respect of the mutual influence on the art representation"

並木誠士（京都工芸繊維大学）「大徳寺大仙院檀那之間花鳥図の革新的位置—東アジア的視点から—」

韓泰文（釜山大学）「朝鮮通信使と韓日文化交流」

高橋博巳（金城学院大学）"A republic of letters" in East Asia'

李鍾虎（安東大学）「申維翰の日本旅行と文化交流」

富士山や金剛山のスライドを見ながら、兪先生の話術に耳を傾けていると、往時の通信使の交歓もかくやと思われたほどである。韓・李両先生の諸資料に基づく具体的な言及や、並木先生の日・明の文化交流という広い視野から室町美術を解析される手法は18世紀的観点から

見ても刺激的だった。私個人にとっては、昨年の国際18世紀学会（於 UCLA）「東アジアと啓蒙」セッションで "Korean Envoys and Japanese Confucians" を発表したあと、時を置かずに続編を、しかも通信使ゆかりの地で発表できたのは幸いだった。何よりの収穫は、札幌大会以来の鄭珉教授に続いて、韓国の研究者と知見を交換できる条件が整ったことであろう。18世紀の東アジアにも国境を越えた文人の交流があり、コメンテーターの稲賀繁美教授(日文化研)の「このような '文芸共和国' がいつまで存続したか？」の質問で逆に気付かされたのは、「文芸共和国」の理想を過去形で語るばかりでなく、こうした地道な活動を通して継続発展させることの重要性である。なお小論は、1998年の第20回大会共通論題の議論を、今回「東アジア」に適用しようとしたものである。

冒頭で触れた「異文化交流」シンポジウムも、司会・青木孝夫により、
権寧弼（韓国藝術総合学校）「文明の衝突と美術の和解—日本の初期洋画を中心に」
浜下昌宏（神戸女学院大学）「日韓の二つの実学と両者の統合的美学の形成に向けて」
藤田一美（東京大学）「交流と出来 西周の場合」
関周植（嶺南大学）"Weakness of 'Beauty' in the Age of Cross-cultural Exchange"

という、様々に展開可能な、密度の高い、よく整理された内容だったが、時間的な制約と肉体的な疲労とで会場で十分に議論できなかった分を、その夕べに引き続き行われた歓送会で大いに飲み、かつ語り合うことができたのは、これこそが「シンポジウム」だったろう。

多くの個別発表のうち、尹芝恵（広島大学）「葛飾北斎と朝鮮通信使」、オヨンサム（京都大学）「真景図の視線—与謝蕪村の夜色楼台図を通して」、宣承慧（韓国国立中央博物館）「笑いの象徴: 日本絵画における『三笑図』について」が18世紀に係わり、ほかにも Erika Cornari (広島大学)「草庵茶室における『さび』の美」が初々しさで、また Trond Lundemo (ストックホルム大学) "Cinema and the Culture of Writing; On the Reception of Japanese Cinema" や、津上英輔（成城大学）"Presence of the Past: The Nostalgic as an Aesthetic Category" が練達の花を添えて、それぞれ印象にのこった。

最後に、長期に亘る広島大学の皆さんの陰の努力に対し深甚の謝意を表するとともに、英語を主要言語としながらも、日本語を韓国語に、また韓国語は日本語に自在に通訳されたスタッフのご苦勞を多とするものである。

事務局より

名簿について

2005年は名簿作成の年度にあたります。同封いたしましたカードのデータに間違いがないかどうかご確認ください。日本18世紀学会の名簿はそのまま国際18世紀学会の名簿 **International directory of eighteenth-century studies** ととも連動することが求められておりますので、日本語表記およびローマ字表記の両方をご確認ください。また、データに不足のある箇所は、事務局にて印を付けておきましたので、間違いがない場合にも、その旨を事務局にご連絡ください。

なお、事務局へのご連絡は

- e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp
- fax: 03-5841-8958
- 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
美学芸術学研究室

のいずれかをお願いいたします。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

会則改正について

6月12日（土）の総会におきまして、「日本18世紀学会会則」および「日本18世紀学会の役員選出に関する細則」が改正されました。これは主として、現状と一致しない会則および細則を現状に即したものにすることを目指したものです。新会則・新細則はすでに学会HPに掲載してありますが、また次号の年報にも掲載いたします。

アンケートについて

できるだけ多くの会員のご意見を大会運営に反映させるために、大会当日に参加された会員に対して、下記のようなアンケートを行いました。

自由論題に関するアンケート

日本18世紀学会は、2日間の全国大会を、1日目は総会と自由論題、2日目は共通論題に充てるという方針で、運営してきました。勿論、このかたちでプログラムを組むことのできる年もあり、その場合には問題はありません。しかし、近年、自由論題の枠で研究発表を希望される会員が増加傾向にあり、ときには、従来の方式ですべての希望者に発表をお認めすることが難しい事態も生じております。本年は、全員に、少なくとも昨年と同じ50分の発表時間による発表をお願いすることに致しましたが、

1. お1人は2日目に回っていただき、
 2. 閉会の時間が少し遅くなる、
- ということにならざるを得ませんでした。

従来から、この問題については、選抜を行うかどうか、並行の分科会方式をとるか、発表時間を短縮するか、等々について、賛否双方の御意見がありました。最終的には、その時々々の常任幹事会の判断に委ねていただく他はありませんが、会員の意向が顕著な傾向のものであるのなら、それを尊重すべきことは言うまでもありません。そこで、これらの選択肢を以下に記しますので、3択方式でご意見をお寄せください。その際、特に強いご意見であるものについては、二重〇をおつけください。また、最後に、ご意見をお書きいただくようにしましたので、ご自由にお考えを御披露ください。

- 1 A 選抜を行うことはかまわない（当然である、を含む）
B 選抜をすべきではない
C 無回答
- 2 A 分科会方式をとっても構わない
B 分科会方式はとるべきではない（他の方策をとることになります）
C 無回答
- 3 A 発表時間の短縮をしてもよい
B 発表時間は短縮すべきではない（他の方策をとることになります）
C 無回答
- 4 A ミニ・コンサートを止めてよい
B ミニ・コンサートは止めるべきではない
C 無回答
- 5 A 2日目の終了時間がある程度遅くなるのはやむをえない
B 2日目の終了時間は4時頃を超えないでほしい
C 無回答

自由にご意見をお書きください（裏面をお使い下さって結構です）

27名の方からお返事をいただきました（内1名の方は、いずれの項目も「どちらでもよい」と記された上で、詳細なご意見を書いてくださいました）。集計いたしましたところ、次のような結果が得られましたのでご報告いたします。

1. A 18 B 7（内1名は◎） C 1
2. A 14 B 12 C 0
3. A 12 B 13 C 1
4. A 7 B 18 C 1
5. A 17 B 8 C 1

それぞれの項目は相互に関連していますので、単純に多数決によって今後の大会を運営することは不可能ですが、可能な限り会員諸氏のご意見を尊重しつつ、それを今後の大会の運営に反映させる所存でおります。

共通論題

大会の「共通論題」のテーマを募集しております。テーマだけではなく、できるだけ具体的なご提案をお待ちしております。

新入会員（2004年6月11日幹事会承認済）

- | | | |
|-------|-----|--------------------------------------------------------------------|
| 飯島亜衣 | テーマ | 「科学する女性」の教育史的意義～カロライン・ハーシェル（1750-1848）とメアリー・サマヴィル（1780-1872）に注目して～ |
| 近藤豊彦 | テーマ | イギリス18世紀作家と階級制度 |
| 服部典之 | テーマ | スコットランド啓蒙時代における、イギリス小説起源論 |
| 丸本隆 | テーマ | 18世紀の音楽劇 |
| 吉田耕太郎 | テーマ | 18世紀ザクセン知識人研究 |
| 吉村暁子 | テーマ | 近代的自我像における交際術—クニッゲを手がかりに— |

退会者

秋吉良人 出淵敬子 上村忠男 川久保晃志 (04年逝去) 川中子義勝
小林義武 酒井幸三 鈴木亮 (03年逝去) 永田治樹 中村博雄 野中邦子
三邊博之 村田晴夫 米山高生

現幹事会メンバー：安藤隆穂、安西信一(補充幹事：常任幹事・年報担当)、井田尚(補充幹事：常任幹事)、小田部胤久(常任幹事：会計担当)、川島慶子、木村三郎(補充幹事：常任幹事)、近藤和彦(補充幹事：常任幹事)、坂本達哉(常任幹事)、佐々木健一(代表幹事)、高橋博巳、寺田元一(国際幹事)、長尾伸一、堀田誠三、増田真(常任幹事)、渡辺浩(補充幹事：常任幹事)

会計監査：中島ひかる 森村敏己

日本18世紀学会ニュース 第45号 2004年4月発行
発行者 日本18世紀学会 代表者 佐々木 健一
事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室
e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp
fax: 03-5841-8958